

は、大祭司らに対して、自己の権力を誇示し、彼らを索制せんとしているに過ぎないのである。それ故、イエスの存在自体が自己の権威に対する脅威、挑戦であること (二二七) に気付くやいなや、彼もまた前述の守衛同様に著しく動揺し、イエスに対する態度を硬化させてしまうのである。

これら、ユダ、守衛、ピラトの描写に見られるように、説得の結果としての決心、決心の結果としての行動が描かれることは、中世演劇では稀有の例であり、作者ヨーク・リアリストの優れた特質を示すものである。

枝 ヨーク・リアリストの優れた特質をもう一例挙げるならば、それは、頭韻を縦横に駆使した力強い文体である。元来、アングロ・サクソン叙事詩の主要媒体であった頭韻詩形は、ヨーク・サイクルの主たる形成期に当る十四世紀になって、新たに復活を見た。ヨーク・リアリストは、この頭韻詩形を主体に、時折脚韻をも併用しつつ、活気とエネルギーに溢れる独自のスタイルを生み出した。イメージに富む象徴的な詩的用語 (例えば、ユダと押し問答をする際の守衛の言語 163, 169 & 200) や、主要人物の独白 (例えば、ユダの独白 II. 127-53) などの併用も、臨場感溢れる美しい文体を生み出すことに寄与している。

頭韻詩であるこの劇は、十四から成るスタンザをもつ。四強勢をもつ八行と、三強勢をもつ六行で構成され、a b a b

a b a b c d c c c d の韻を踏む。

この劇の上演を担当したギルド「The Cutteleres」は、食用ナイフの製造を手がけた職人組合であった。

(後記) テクストは、Richard Beadle, ed. *The York Plays*, London, Edward Arnold, 1982 を用いた。

ト書は、L. Toulmin Smith, ed. *York Plays*, New York, Russell & Russell, 1963 を参考に、訳者が適宣付加した。なお、本文のなかで、ラテン語で書かれた部分は、片仮名書きとした。

リズムにある。彼が描く登場人物の性格・対話・アクションは、緊密に関連づけられており、これらの有機的な結合を阻害する怖れのある無駄な描写は一切行われていない。彼の描く人間は、類型化され画一化された人間ではなく、血肉を備えた生身の人間である。この事実は、ヨーク・リアリストが、人間をその外面と内面の両面から捉えることを心得ていたことを示している。この劇の中心人物ユダの描写は、その好例である。

陰謀

当時の文学伝統に依拠すれば、ユダは、イエスに対する裏切り行為の故に、地獄落ちを運命づけられた悪魔として描かれるのが常であった。しかし、本篇のユダは、決して、そうした悪の権化ではない。彼は、例えば、従来、悪の化身・反キリスト (Antichrist) として見做されてきたカイン (Cain) やヘロデ (Herod) などとは似ても似つかぬ卑少な存在として描かれている。彼らに見られるような尊大さ、自己顕示欲とは無縁の、ごく凡庸な人間、「裏切り」という意味において、この劇の観客と同列にいる人間として描かれている。しかし、その平凡な人間が、如何ともし難い激情に駆られて、瞬間のうち、死の大罪を犯してしまうという点に、人間の脆さ、黒白つけがたい心の有り様に対する、作者「リアリスト」の鋭い洞察力が窺えるのである。人間の言動に対する作者「リアリスト」の関心は、人間の心理に対する彼の関心によって

支えられており、その心理の過程について、彼は描くことを忘れない。それは、例えば、ピラト邸の守衛や、大祭司アンナスとカヤパなどの登場人物についても真実である。

ピラト邸の守衛は、ユダが胡散臭い人物であると見抜き、彼の取り次ぎを拒否し、ここで二人の押し問答が始まる。しかし、この強情で不機嫌な守衛もまた、人間らしい弱点の持ち主である。当初、守衛は、大した権幕でユダに門前払いをくわせる。しかし、イエスの挑発と扇動によって惹き起された社会不穏が、彼の主人ピラトや大祭司らの権威失墜にもつながりかねないことをユダに示唆されるや、大いに動揺し、あわてふためいて、ユダ来邸の主旨を、ピラトに告げに行くのであり (I. 190)、この間の説得のプロセスは巧妙に描かれている。

優柔不断で、捉えどころのない総督ピラトもまた、ヨーク・リアリストの優れた創作のひとつである。ピラトは、当初、大祭司らの如何なる訴えにも耳を貸そうとはしない。それは、彼が、彼らの告訴の根底に、イエスに対する私憤の情が存在することを看破しているためである (II. 35-37, 67 & 92-93)。しかし、実際のところ、私的感情に捉われているという点では、ピラト自身もその例外ではない。彼が大祭司らを窘めるのは、イエスに対する同情心からではないし、いわんや、公正な裁判を期しているためでもないのである。彼

イエスを大祭司らに売り渡す謝礼金は、三十ペンス(152)となる。ユダがイエスを売った動機やその目的については、確かなことは分らない。しかしこの劇は、その理由を、単純な金銭上の問題にすり替えている。なおここで聖書の記述「三百デナリ」が「三百ペンス」とされているのは、中世演劇特有のアナクロニズムの一例である。

- (4) 占星学によれば、火星は、攻撃性と野心の象徴であり、不吉な死を表す惑星とされた。
- (5) カヤパは、彼の面前にひれ伏して、挨拶をしようとしなかったユダを咎めている。
- (6) アンナスは、ユダに対して、突然に親しげに、「兄弟」と呼びかけて、底意のあるところを見せる。
- (7) この問いは、総督ピラトがイエスの素性について、全く無知であることを示している。
- (8) 些少の負債を理由に、イエスを裏切ること。

解 説

ここに訳出したヨーク・サイクル第二六番『陰謀』(The Conspiracy) は、イエスのエルサレム入城から、捕縛、審問を経て磔刑にと至る受難劇の導入部にあたる部分である。本篇の典拠は、『マタイ福音書』26・3—9、14—16、『マルコ福音書』14・1—5、10、11、44、『ルカ福音書』22・2—6である。しかし、キリスト受難の物語は、コルプス・クリ

ステイ(Corpus Christi) 劇の神学的構図において、極めて重要な位置を占めているために、これらの聖書の記述は、著しく拡大解釈され、虚構的要素が加味され、それらの素材の配置にも工夫が施された結果として、緊迫感と迫力に富む質の高い劇作品が誕生することとなった。

イエスの十二人の弟子の一人、イスカリオテのユダは、些細な金銭上の恨みから、師イエスに憎しみと敵意を抱き、彼を売り渡す決意を固めて、総督ピラトの公邸へ急ぐ。この劇は、総行数わずか二九四行のなかに、以後の受難劇に登場するおおかたの主要人物を配し、ユダとユダヤの権威筋の者たちとの間に交された忌わしい取り引きの有様を、逼真的に描いている。

この劇は、通称、ヨーク・リアリスト(York Realist)と呼ばれる無名の作者によって、ほぼ単独に創作されたものと考えられている。今日、ヨーク劇のうち八篇(Nos. 26, 28, 29, 30, 31, 32, 33 & 36)が彼の作と推定されているが、このうち第三三番『ピラトの前のキリスト(その2)』、『判決』(Christ before Pilate (2): The Judgement) までの計七篇が、いわゆる受難劇グループに含まれており、それらは、彼の作と特定しうる共通の特色を示している。

ヨーク・リアリストの顕著な特色は、彼の仮名「リアリスト」が示すように、全篇を貫く冷徹にして緻密な心理的リア

真実を明かせば、奴はペテンの塊です。

奴を信じるなど愚の骨頂ですよ。

ピラト わが命に服して、言い争いを止めよ。

と申すも、難局に際しては、服従こそ得策なのだ。

ユダよ、わが利益のため、早速行動を起こしてくれ。

ユダ でも、まだ安心料の謝礼を、一ペニーすら払って頂い

ておりません。

ピラト お前の希望通り、いつなりと支払ってやろう。

それ故、御上第一の奉公をして貰いたい。

さあ、ユダよ、不平を言うのもそれ位にして

約束の銀貨を残らず受け取るがよい。

ユダ 分かりました。これでわたしの悲しみも和らぎます。

兵士一 さあ、元気を出せ。

ユダ ええ、わたしを一人にしてください。

すぐにも、あの謀反人をひっ捕えてみせます。

そうすれば、わたしも嬉しいです。

ピラト ユダ、お前の約束を守って、わがために良い働きを

してくれ。

さすれば、わたしも、お前に協力し、金銭的な援助を

約束しよう。

ユダ どうしたら彼を逮捕できるかお教えします。

アンナス この件に関して、われらにそれ以上の願いは

ないのだ。

兵士一 その愚か者を逮捕したら、その肋骨をへし折り、

出血多量で苦しみがかせてやらねば気が済まない。

ピラト そうは参らぬ。諸君、どれ程彼を鞭打とうとも

構わないが、彼の肉体を傷つけてはならない。

というのは、彼が無実の場合は、釈放せねばならない

からだ。

それ故、彼の逮捕に赴くときは、

彼の身体に危害を加えぬよう用心せよ。

兵士二 わたしらは、彼がお縄に逆らわぬよう心がける

だけです。

しかし、無事、奴を御前に連れて来ます。

ピラト さあ、急ぎ彼を引っ捕えて来い。

一致団結し、進んで、おのが役目につくのだ。

(ユダと兵士ら退場)

註

(1) (11. 27-74)『マタイ福音書』21・12、13

(2) (マリヤが)、高値で純粋なナルドの香油をイエスの足に注いだことに、ユダは立腹している。(『ヨハネの福音書』12・3-6を参照)

(3) 問題の香油を三百ペンスで売っていたら、その代金の1/10にあたる三十ペンスを、ユダは着服出来たはずである。それ故、

ど阿呆と共に住んでいるのか。(7)

兵士一 閣下、そうでした。現在でもそうでしよう。

ピヤト それなら、この下郎が、こうした悪巧みをした

理由を知りたい。

兵士二 当人に尋ねられては如何です。万一、奴に謀反心が

あれば、閣下は見破ることが出来ましようから。

ピラト おい、その者、自分の師を売るとは、如何に非道な

ことを彼はしたのか。

ユダ 然るべき補償をして頂けるとして、わたしがあなた方

から頂戴するはずの金額の金を、

主人はわたしに支払ってくれなかったからです。

アンナス われらが掟をかく軽んずるとは、(8) 貴様はわれら

黒 川 枝
を愚弄する気か。

然らば、いかさま悪魔に取っ捕まるがよい。

兵士一 その時は、悪巧みの限りをつくすがいいや。

博士一 悪さ承知で、奴を存分にいじめてやれ。

博士二 そうだ、奴を即刻、縛り首にでもするなら別だがね。(20)

カヤパ 皆さん、無駄口が多過ぎますぞ。

だが、ユダよ、わたしはお前を信じている。

それ故、必ず、あの悪党を逮捕する手だてを教えてください。

さもないと、あの悪党め、奸計を弄して、ここから

逃げ出すかも知れないのだ。

ユダ 主人が群衆に包囲された場合は、彼をすぐにも

逮捕できる方法を教えます。

必ず約束を守ります。

兵士一 われわれは奴の顔を知らないのだ。

ユダ わたしがキスする者を

ひっ捕えて下さい。

兵士二 それは変人のお前にぴったりの役まわりだよ、

断言する。

だが、われわれに対しては常に賢明な警告を

することを心がけてくれ。

先頭に立つお前の後から、われわれは大勢でついて行く

ことにしよう。

だから、お前は周囲の用心を怠りなく頼む。

ユダ 分かりました。分かりました。

太陽が沈んだらすぐに、好機を探ることにします。

いいですね。

兵士一 裏切り者のお前から先に行け。

兵士二 そうだ、悪者からな。

博士一 一体あの者は誰なんです。

博士二 君、あれは悪党ですよ。真実がわれわれを裏切る

ことがなければね。

ひとえに皆様方のためです。

アンナス 何か由々しきことを知っているのか、
言ってみよ。

ユダ 閣下、あなたが御立腹のことについて、わたしの承知
していることがあります。

御身にかかわる脅威を取り除くため、わたしは閣下と

取り引きをしたのです。

ピラト お前は取り引きが出来るのか。

ユダ さもなければ、こう断言しますのは狂気の沙汰です。

アンナス 何か、われらが脅威の種の厄介事を、お前は知っ
ているのか。

というのも、兄弟⁽⁶⁾、お前は残忍な奴だからな。

ユダ 閣下、わたくしの申し立ては厳しいものです。

もし閣下がわたくしと取り引きをして買って頂ければ、
すぐにもイエスを売りたいのです。

博士一 そういう理由なら、ただちに、わたしの祝福を
受けるがよい。

さて、これで獲物を発見した。

ユダ 協力頂けるようなら、

すぐにも彼を引き渡すことを約束します。

ピラト お前の名前を言え。

ユダ イスカリオテのユダと申します。

ピラト イエスを、われらの正道の裁きに委ねるお前は、
正義の人である。

だが、彼を幾らで売ってくれるのか。お前がつけた値段を
言ってみよ。

ユダ ほんの些少頂いて帰るだけで充分です。

ピラト それで、幾ら支払えばよいのか。

ユダ 閣下、たつぷり、三十ペンスで結構です。

ピラト さて、各々方、あなた方は彼の言い値でよいのか。

博士一 承諾しませんと、われらは良心に反することに
なります。

奴が有罪であることを、ユダは知っているようですからな。

ピラト では、衆議一決だ。

だが、ユダ、お前はこの取り引きの印を押すことに
異存はないか。

ユダ ええ、早速にでも。

ピラト それは結構。

兵士二 あれを見よ、せっかちな裏切者めが。

兵士一 とここで閣下、どうぞ御内密に願います。

この悪党が自分の主人を粗末に扱いましたことを。

ピラト 何と申す。奴は、われらを立腹させた件^{くだん}の

ユダ いや、旦那、そうは言ってません。

衆議会に俺を召喚して貰えば、

博士や騎士の貴人方に、その理由をお話しします。

守衛 お前はここで待っている。自慢話はそれからだ。

俺は、色鮮やかな幟の立つ裁判所へ一っ走り、

権力者の面々のお言葉を伺うまでもなく、

お前のような奴が拜謁を願っていると申し上げよう。

(守衛は裁判所へ赴く)

さて、あらゆる知識の泉であらせられる閣下、

事件を御報告するため参上しました。

枝
ピラト よし、話してみよ、洗いざらい話すがよい。

川
カヤバ 左様、この件にわれらもかわるの必要があれば、

黒
閣下こそ統率者でおられますから、

われらは喜んで、閣下の御命令通り行動することにいたし

ます。

185

守衛 閣下、全てを申し上げますが、ただ今、

怒りにふくらんだ下郎が、あわてふためいて参上して

おります。

ピラト 何の用だ。

守衛 わたくしには分かりませんが、奴はマントを

着た男です。

悪党そんな面構えで、挨拶のキスも遠慮したい不細工な

奴です。

ピラト そ奴を連れて来い。直ちに彼の苦情を審議すること

にしよう。

放言に惑わされることのないようにな。

(守衛はユダのところへ戻る)

守衛 おい、直ちに御前へ出るがいい、お前急いでいる

のだろう。

だが、御機嫌を損じぬように、お話し申し上げるのだぞ。

(ユダはピラトらの面前へ出る)

ユダ 皆様方、幸福と名声の花である主が、

皆様方の幸福をお守り下さるように。

ピラト 近う寄れ。お前の言葉気に入ったぞ。

カヤバ おい、聞いているのか。頭が高いぞ。(5)

ピラト おい、咎められてはまずい。(カヤバに向かって)

そう悪し様に言うのは控えられたい。

205

210

だが、おのおの方、裁きの場にいることを恐れては

ならない。

ユダ 御歴々の方々、せわしく御前に参上しましたのも、

200

(こうして、ユダはピラト邸の扉を叩く)

おい門番、この堂々たる邸の扉を

是非とも開けてくれ。

お役に立てるよう、お偉方に会わせてくれ。

(守衛、扉を開けて)

守衛 とつとと消え失せろ、このぶつちよ面の悪党め、

呪われるがいい。

お前のその睨み顔ときたら、まったく薄気味悪いや。

おかげで心臓がふくれてきやがる。

ユダ 旦那、今回はお助けを。俺のやることを邪魔しないで

おくんないよ。

陰 謀

耳寄りな話があるんです。

守衛 何だと、誰かを裏切るのかね。

お前のそのいかさま顔の表情から、そうと分るさ。

お前に目をかけることは愚の骨頂。

火星神マルスの印⁽⁴⁾がお前にはついていて、

俺の理解するところでは、

お前は出来の悪い奴、

大胆不敵、根っからの悪党、と記されているさ。

ユダ 旦那、俺のひげ面に向かつて吠え立てたりすると、

あんたはひどい目に会いますぜ。

165

守衛 おい、げじげじ眉の悪党、どうしてそんなに威張り

散らしているんだい。

実際、お前の顔には、重大な裏切りが読み取れる。

お前がここに来たのは、悪意を背負ってか、

あの全能のひとを痛めつける決意だな。

ユダ 旦那、そんな悪意はないさ、だが巧い話があるのさ。

守衛 おい、絞首刑を待っている異端者め、お前は全く

下らぬ奴だな。

たつきのたたない哀れな奴め、

とつとと消え失せないと、ひどい目にあわせてやるぞ。

ユダ ねえ、旦那、今すぐにも、俺の話聞いて

おくんない。

これは嘘いつわりのない情報です。

守衛 おい、悪党、待て、

声を荒立てた喋りっぷり、まったくよく喋る下郎だ。

ユダ 旦那、実際のところ、嘘かまことか調べて貰えれば、

これは良い知らせですぜ。

俺の働きで、あんたの御主人筋は、危ない目に逢わず

に済むんですから。

守衛 何だと、お前は何か、御主人方に対する

良からぬ企てを知っているのか。

160

180

175

170

すぐにも復讐の槌が、彼にふり下ろされよう。

博士一　そう願いたいものです。

さすれば、閣下の御栄華も御安泰、

慎重に御同意頂ければのことですが。

ピラト　よし分かった。巧く事を進めることにしよう。

ならず者に、降参の仕方を教えてやろう。

博士二　そうして、われらが力を思い知らせてやりましょう。¹²⁰

われら挙つて、良き成果を閣下にお願ひします。

〔ピラト邸の門前に、ユダが一人で登場〕

ユダ　「甚大ナル被害ヲ被リシ故ニ」かのユダヤ人イエスを

俺は憎んでいる。

奴は、俺、すなわちこのユダに、不公平だったからな。

実を申して、癩病人シモンの家で、夕食の席に着いていた

ときに、

その邪な企みが、ふと俺の心に芽生えたのだ。

奴のもとへ、箱をひとつ届けに来た女がいて、これが俺の

腹に据えかねた。⁽²⁾

そいつは、熱心に、奴の裸足の足許にひれ伏した。

女は奴の両足に、絞り立ての大切な油を塗つてやった。

この女の行為に俺は立腹したのだ。

俺の気持を明かせば、これこそが理由なのだ。

135

何故なら、俺は奴の金箱を預かつていて、

幾らの金が入つても、

その1-10を失敬していたためさ。

だが、今では欲しい金も手に入らないから、

その報いを奴に、高く支払わせてやろう。

今言った、その香油だが、銀三百枚で

売り払つた後で、純なる憐憫の命ずるままに、

貧乏人に施してやつてもよかつたのさ。

とは言え、俺は、貧乏人への思いやりに駆られている

わけではないのだ。

正直なところ、俺の癩の種は、件の1-10の余禄のことさ。

三百ペンスに対して、三十ペンスの大枚を、⁽³⁾

損したことになるのだからな。

この金を貰えないのだから、不平を言い歩くことにしよう。

それ故、今からすぐに、

大祭司の人びとのところへ赴き、

奴を売り渡してこよう。休む暇もなく。

秘密の取り引きで、三十ペンスでな。

こうして、奴には怒りの復讐をして、

思い知らせてくれよう。

150

145

140

罪の住み家と化している、などと奴は言っています。

ピラト こはいかに！ あなたがたのために行動するとは、奴は狂人ではないか。

あなたがたは、無実の者を、悪意をもってまつ殺せんとしているのであり、

あなたがたの怨恨が、不埒にも先走りしているのである。

カヤパ 閣下、滅相もないことです。われわれは正しい訴えをしていただけです。

ピラト 実際、あなたがたは残酷過ぎはしないか。

カヤパ 何故です、閣下。奴はわれらが法の転覆を計ったのですぞ。

われらが奴を憎むのも当然至極、

是非、閣下の御支持を頂きたい。

あるいはまた、奴は安息日に病人を癒し、

われらが意見に耳を貸さず、進んで罪に耽っています。

兵士二 閣下、奴は、治療を求めて来る者を

ことごとく癒してやっています。

だが、聖日を守ろうとしないのだから、呪われるがよい。

それ故、奴を縛り首にして下さい。首を揜ねて下さい。

ピラト まあ、まあ、落着きたまえ。

彼が無実であろうとも、あなたがたは、性急に彼を糾弾

せんとしているが、

根拠なくして、さような厄介事に大胆に手出しされる

ことは得策ではなからう。

よろしいか。あなたがたの申し立ては真実のみ、

いささかなりと、虚言を述べたててはならぬ。

アンナス われわれの言葉が真実であることを保証します。

ピラト そういうことなら、この事件の審理をあえて進めるとしよう。

カヤパ 閣下、彼の罪業がさほどでなければ、われらは事を構える気などさらさらありませんでした。

何故なら、奴は、彼の説教をきくわれらが民を、邪道に

陥れております。

この点につき、断固彼の力を弱体化させるべきです。

博士二 閣下、全くその通りです。また、かの卑法者は、

われらの王を自称し、

そのため、民衆の不安が昂じております。

ピラト しかれば、その奸計故に、彼は災いを被ることに
なるであろう。

彼の肉体を支える骨に、思い知らせてやるがよからう。

それ故、その卑劣漢は、われらの怒りから逃げおさせる

ことは出来ず、

重荷を背負い、われらを滅ぼすだの、解放するのだと抜かしています。

ピラト 彼の主張はあなた方の心を動かし、あなた方の機嫌もおさまるであろう。

アンナス 滅相もない！ かほどの悪意を見せつけられて、憎しみを抑えることなど到底出来ません。

あの愚か者が！ 奴はわれらを裁くなどと言っており、これ程までの侮辱と悪意はありません。

ピラト 彼を責めるのは、あなた方の役目、だが、法は依然わが統治下にあるのだ。

博士一 閣下、お考え頂ければ、

奴こそ糾弾されて然るべきとお分り頂けましょう。

と申しますのも、彼奴はわれらが寺院内で、十回以上も

説教をやり、

両替商の計算や仕訳を待つ宝物が、テーブル一杯並べられて、いるのを見て、

彼の悪行について率直に申し述べれば、

奴は一向にお構いなしで、全部ひっくり返して

しまったのです。(1) あの罪人めが！

カヤバ 御覧下さい。閣下、これこそ特記に値する罪であります。

それ故、力づくでも、あの変節者を鎮圧して下さるようお願いいたします。

ピラト どういうお積りか。

カヤバ 扇動罪によって、死刑を課して下さい。

ピラト しかれば、専らあなたがたの専制的権力によって、彼を不当待遇することになろう。

皆さん、このぐらいにして、もう二度と口出ししてはならぬ。

だが、あなたがたの寺院では、一体何が起きたのか。

兵士一 畜生！ 閣下、奴は法外にも、正しく法を守って物売りしていた者たちを追っ払ったのです。

ピラト しかれば、彼は、彼らを有罪と見做し、

その事由を明らかにしたのであろう。

だが、そのとき彼は何を説いたのか。お前らの話しにある

ようなことか。

兵士一 閣下、われらの寺院は、天に座し給う父なる神の塔であり、

それ故、預言者たちは、その場で祈りを捧げることを義務づけた。

また、その場で商いを営む者は、主の家を、望むがままに頻繁に、

アンナス 御意にございます。閣下、良からぬ振舞を

致します謀反人が一名おります。

と申しますのも、この者の噂が國中に広まりました結果、

大騒動が持ち上がりました。

ピラト あなた方も彼を憎んでおられるようだな。その心は

憎しみに充ちており、

わたしの尽力で、彼を憂き目にあわせうるか、知りたがっ

ておられる。

だが、何故あなた方はそれ程立腹しておられるのか、

怒りを抑えて、その理由を述べられては如何か。

カヤパ 閣下、彼奴の教えたるや、全く侮辱的なものです。

ピラト そう興奮なさらぬよう御用心頂きたい。

アンナス 全くもって、閣下、奴が罪を犯さぬよう、

閣下の御力添えを乞う次第です。

ピラト かねての警告通り、その卑劣漢が、わが管轄内で、

何らかの悪事を働かし場合、

直ちにわたしに知らせて欲しい。

しかし、その者の発言が法に則したもならば、彼を長き

にわたり糾弾してはならぬ。

また、わが意に叶えば、咎めなく、この地に

住まうこともあい許す積りだ。

博士一 もし、そのいかさまの大嘘つきが、閣下の御寵愛を

受けることになれば、

われらが臣は、一人の友を失うことになりましょう。

閣下、彼の教えは依然強い影響力をもつもので

ありますから、

早急に打倒させんと、当方が逆に倒されてしまいます。

何故なら、彼は人びとに命じて、

自らを、偉大なる神の御子と呼ばせています。

奴はこのように挑発しています。

そして、自らは、いと高き天の住まいに、

座するであろうと言っています。

ピラト 友よ、彼の手に権力が委ねられれば、

あなたの方力で彼を倒せるとは思えない。

だが、あなた方が、あなた方やその子孫の罪を償うべく、

天から下るであろうと言ったのは、その人のことではな

かったのか。

カヤパ おお、閣下、早急な判断はお控え下さい。

何故なら、キリスト降誕のときを知る者は、誰一人

おりません。

しかし、この卑劣漢の血統につきましては、われらは

よく承知しております。

奴は自らを神になぞらえ、永遠に生きて、

その願いも、思いのまま成就しうる立場にあれば、
諸公に申す、必ずやわれに報告すべし、
難問、紛争など、

早速にも処理すべきことあれば。
貴殿の助け、ことごとくわが掌中になればなり。

25

(アンナス、カヤパ登場)

カヤパ 閣下の御前にて、事の真実を確認せんがため、
しかるべく、閣下にお願ひ申し上げます。

ピラト 何だ。何者か、僭越なる不心得者がいると言うのか。

または、邪なる者共の犯した悪事を、われらが
始末せねばならぬと申すか。

30

ヨーク・サイクル第二六番

—ナイフ製造職人の劇—

陰謀

黒川 樟枝

(ピラト公邸)

ピラト　いと位高く著名なる王に、仕えるわれは、

この国の治安を預かる総督である。

わが輩下の高位聖職者は、わが命に服すべし、

いくさ時に、互いにその胸当てを裂き合うつわもの共も

また然り。

塔の聳ゆるこの町はわが管轄下であり、

わが命に叛く者は、必ずや、すみやかに、有罪に処せられ

るであらう。

わが肩書から出ずる権力は、滅ぶることを知らず、しかし

諸公、名騎士らに対して、わが行いは、左程確たるものに

あらず。

その身分、いと、やんごとなき者共は、

わが欲するところを、日々果たすべし、

またその者共の数極めて少なきときは、

彼らの報酬を増額すべし、

然るに不平を言いて、われを憤怒せしむる者あれば、
用心すべし、われ極めて残忍なる気性の者なる故。

かく申すわれの名は、ポンティオ・ピラト、

三国を治むる者なり、

わが姿を現すところいづこなりと、出会いし者を

震撼せしむる者なり、

われ、第一に、哲学者のうちに、わが名声を獲得せり。

それ故、われに並ぶ者なきとの世評を求めたり。

例え、わがかんばせ、棺を飾る花の如く、その色鮮かなり

とも、

われを厳しく咎むる者あれば、必ずや思い知らすべし。

わが前にひれ伏さざる者や、教訓を学ばざる者あれば、

われ、その者の生命を奪うか、生涯の不具者にせんとぞ

思う故。

われはかくありて、